

うつしから読み取る技術的アーカイブ

2019年度活動報告

本研究は、明治13年（1880）に京都府画学校が開学して以来、約140年にわたって続くうつしの技術や関連資料のアーカイブを行うことで、本学の貴重な記憶として継承していくことを目的としている。また、オリジナルに対するコピーという二頂対立的な関係から離れ、うつしそれ自体について、芸術大学らしい創造的な観点から技術・学術・文化などから総合して捉え直すことを目指している。

これまで本研究では、本学日本画専攻で模写を指導した入江波光が従事した法隆寺金堂壁画模写事業に関する記録や、立命館大学アート・リサーチセンターの協力を得て本学芸術資料館が所蔵する模本資料のデジタルアーカイブなどに取り組んできた。

本年度はこのような研究活動の成果を踏まえ、本学芸術資料館と合同で第5期収蔵品展「模写を読む—画家は何を写してきたのか—」を開催した。本展は令和元年（2019）10月26日から12月1日まで本学芸術資料館陳列室で開かれ、11月26日には企画を担当した美術学部教授の田島達也と日本画専攻博士（後期）課程/美術学部非常勤講師の小林玉雨によるギャラリートークが行われた。

本学芸術資料館には、江戸から平成にかけて制作された2,000点に及ぶうつし（模本資料）が収蔵されている。出展作品は文化財の保存修復事業の原点として最も有名な法隆寺金堂壁画模写事業以前に制作されたものを多く採用した。金堂壁画模写事業以前のうつしのコレクションは、近世京都画壇に起源をもつ本学ならではの貴重なものである。本展ではうつしの時代性に着目し、一点一点の分析に留まらず、傾向から全体像を把握し、その差異を展示により可視化することを試みた。うつしは変わらないものの代表のようにみえるが実際には極めて歴史的な産物であり、その差異は時代性だけでなく、何を写すのかという目的意識と、どのように写すのかという技術の選択により生まれるといえる。収蔵品を具体例に、本学におけるうつしの歴史的な変遷を読むことで、学内外にその存在を示す貴重な機会となった。

また、本年度の研究成果として、第5期収蔵品展「模写を読む—画家は何を写してきたのか—」の展覧会図録を発刊した。詳細については図録を参照されたい。

小林玉雨（美術学部非常勤講師）